

14	岡 崎	六 名 小 学 校	氏名	カ チ シュウヘイ 可知 周平
分科会番号	03a	分科会名	社会科教育（小学校）	

1. 研究テーマ

切実感を抱いて追究し、当時の人々の思いに迫る子の育成
 — 6年「学校日誌から戦時下へタイムスリップ」の学習を通して —

2. 研究概要

(1) 主題設定の理由

6年生になって初めて歴史を学ぶ子供たちの目は輝いていた。5月のアンケートでは、91%の子供が「歴史に興味がある」と答えた。しかし、9月に行ったアンケートでは「歴史に興味がある」と答えた子供は、68%にまで低下していた。その理由として、「覚えることが多すぎる」という声が聞かれた。このような結果になったのは、教科書のみを使い、知識重視の授業を淡々と進めてきた教師側にこそ大きな責任があると捉えた。本来歴史は、過去の出来事を覚えるだけの学習ではない。出来事の背景にある生活や立場、状況などを手がかりに、当時の人々が何を感じ、どんな価値観をもって生きていたのかを想像し、その思いに迫ろうとする学習だと考える。それにより、事象を多角的に捉えることができる。だからこそ、知識重視の授業から脱却する必要性を痛切に感じた。

以上のことから、本研究では、教科書に限らず多様な資料を活用し、多角的に歴史認識を捉えていく中で、当時の人々の思いに迫ろうとする子供の育成を目指した。その際、人々の思いに迫るためには、「なぜ」「どうして」といった疑問を基に、史実を自らの問題として捉えたり、追究への意欲を高めたりするなど、切実感を抱いて学びに向かう姿勢を育むことが重要であると考えた。そこで、本主題の実現に向けた実践を行うこととした。

(2) 研究主題の定義 ※以下のいずれかが該当すればよい。

【切実感を抱く】

- ・課題に対して、「もっと知りたい」「もし自分だったら」といった追究意欲や自分と結び付ける感情を抱くこと。
- ・自分の考えに対して、「本当にそうなのか」と批判的に問い直すこと。
- ・自分の考えを発信し、他者に「どう思うか」と意見を求めること。

【当時の人々の思いに迫る】

- ・資料を基にして、戦時下を生きた当時の人々が、何を感じ、何を考え、どんな価値観をもっていただのかを、当事者に近い感覚で想像し、捉えようとする。
- ・出征した兵士や当時の子供たちなど、様々な立場の人々に思いを巡らせ、多角的な視点から考察すること。

(3) 目指す子供像

切実感を抱いて課題を追究し、戦時下を生きた人々の思いに迫ることができる子供

(4) 仮説と手立て

仮説 単元を通して、子供の思考に沿った単元構成や、価値ある「人」「もの」「こと」と出会う場を設定し、多角的な見方ができるように働きかければ、子供は課題に対して切実感を抱いて追究し、当時の人々の思いに迫ることができるだろう。

【手立てa 子供の思考に沿った単元構成】

子供が学習過程において見いだした疑問や発見を教師が把握して、次時の学習課題や活動に反映させることにより、子供の思考が途切れず、連続的に展開できるようにし、切実感をもって課題に取り組めるようにする。

【手立てb 戦争に関する「人」「もの」「こと」と出会う場の設定】

「人」 戦争体験者との邂逅(かいこう)：その時代に子供や兵隊など、それぞれ異なる立場や場所で戦争を経験された方々から体験談を聞く活動を取り入れることで、当時の人々がどのような思いや価値観をもって生きていたのかを具体的に捉えられるようにする。

「もの」 学校日誌・風土記の活用：本校に現存する学校日誌や風土記などの地域資料を活用することで、戦時下の人々の暮らしや学校生活を具体的に想像できるようにする。また、自分たちが通う学校や学区にも戦争の歴史があったことを実感させ、戦争を自分たちの生活と結び付けて捉えられるようにする。

「こと」 戦時下タイムスリップ体験：当時の学校生活や暮らしを疑似的に体験する「タイムスリップ」と称した活動を取り入れたり、実際に放送されたラジオを聞かせたりすることで、戦時下を生きた人々の生活や心情を体験し、不安や苦しさ、願いなどを実感をもって捉えられるようにする。また、焼夷弾などの実物に触れる機会を設けることで、当時の人々が置かれていた状況を感覚的に理解し、その思いを切実に想像できるようにする。

このような「人」「もの」「こと」との出会いを通して、子供が現在の生活と比較したり、当事者の立場に立ったりしながら、当時の人々の思いに迫ることができるようにする。

【手立てc 多角的な見方へと導く「教師の出」】

戦時下の人々が「どんな立場で、何を考え、どのような気持ちで行動していたのか」について想像させる問いを投げかけることにより、子供たちの戦争に対する「怖い」「悲しい」だけの一面的な見方に揺さぶりをかける。さらに友達と異なる意見と出会う場を教師が意図的に設定し、参考にしたたり、比較したりすることで、多角的な見方へと発展させ、当時の人々の思いに深く迫ることができるようにする。

(5) 抽出児童Aの社会の授業の取り組み方と教師の願い

児童Aは、「歴史は単なる昔話」と口にするなど歴史に興味・関心をあまりもっておらず、通り一遍の見方に陥ることが多い。前単元「世界に歩み出した日本」での振り返り（次頁資料1）では、「女性に選挙権が与えられな

かったのは、女性の身分が男性より低く見られていたと思う」と史実を根拠に、自分なりの考えを表現することができている。その一方で、授業を通して分かったことや思ったことを記述するだけにとどまり、「なぜ女性の身分が低く見られたのか」「どのような働きかけで身分が改善されていくのか」など、課題に対する切実感を抱く様子は見られなかった。また、当時の女性について「かわいそうだった」とどこか他人事で、当時の感覚に迫りきることができず、表面的な考えにしか至らなかった。そんな児童Aに「当時の女性ならどう思うか」と問うと、「当時の人じゃないから分かるわけない」と答えた。

そこで、児童Aには自身の考えにとどまることなく、当時の人々の思いを多角的に捉えながら思考を深めてほしいと考えた。そして、児童Aの考えを基に学級全体が歴史の世界へと引き込まれていく授業を展開したい。

3. 単元目標と単元構想

- ①太平洋戦争中の国民生活や戦時体制などについて、戦争体験者から話を聞いたり、資料から必要な情報を集めたりしながら、国民や国土が大きな被害を受けたことを理解することができる。（知識・技能）
- ②太平洋戦争下の状況や国民生活を調べ、史実を根拠に当時の人々の戦争に対する思いについて多角的な視点から捉え、表現することができる。（思考・判断・表現）
- ③「戦時中を生きた人々はどんな思いだったのだろう」という課題に迫るために、戦争とその時代を生きた人々の暮らしに関心を持ち、資料を集めたり、まとめたりしながら、主体的に追究しようとする。（主体的に学習に取り組む態度）

時	学習課題	活動内容	手立て
1～3	太平洋戦争のきっかけに迫ろう	・学校日誌の記述から太平洋戦争の開戦の史実を知る。 ・日中戦争や満州事変などの開戦に至った歴史的背景を調べる。 ・戦争体験者の話から、当時と今の価値観のずれをつかむ。	a.b.c
【単元を貫く課題】戦時中を生きた人々はどんな思いだったのだろう			
4～5	戦争による影響について調べよう	・「空襲」や「原爆」の資料から全国の被害を追究する。	a.b.c
6	岡崎市の被害に迫ろう	・体験談を聞き、岡崎市にも大規模な空襲があった史実をつかむ。	a.b
7	大樹寺学区の被害に迫ろう	・学校日誌や風土記を活用したり、大樹寺学区の戦争体験談を聞いたりしながら、当時の学区の様子について調べる。	a.b
8	当時の国民生活に迫ろう	・戦争体験者の話や学校日誌から、当時の国民生活を調べる。	a.b
9～11	当時の子供の思いに迫ろう	・「タイムスリップ」と名付けた追体験を通して、戦時下の生活を疑似的に体験し、当時の子供の思いについて考察する。	a.b.c
12～14	親・先生・兵隊の思いに迫ろう	・戦争体験談を基に、当時の親・先生・兵隊の思いを考察する。	a.b.c
15	戦時中を生きた人々はどんな思いだったのだろう	・これまでの学習から構築した自分なりの考えについて話し合う。 ・昭和20年8月15日学校日誌『重大放送聴取』の記述から、終戦に至った史実をつかみ、玉音放送を聞いた人々の思いに迫る。	a.b.c
16～17	当時の人々に思いを届けよう	・協力してくださった戦争体験者の方々に終戦の日の思いを問う。 ・当時を生きた人々への思いを手紙に記す。	a.b

4. 研究の実践

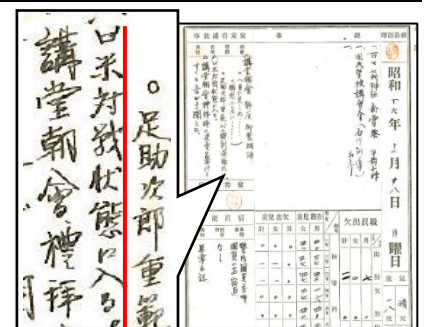
<第1～3時 太平洋戦争のきっかけに迫ろう>

第1時、単元の導入として、歴史は作られた話ではなく、現実起きた出来事であることを実感できるように、本校に現存する昭和16年の学校日誌（資料2）を提示した【手立てb「もの」】。子供たちはまじまじと見つめ、「無言清掃せよ」って、80年前も今と変わらないねなどと、今の学校生活と比較しながら、当時の様子を思い浮かべる姿が見られた。そんな中で一人が12月8日の頁から「日米対戦状態に入る」という記述（資料2）を発見し、「なんかこれってやばくない？」と声を上げた。すると、「戦争だ」とつぶやき始め、太平洋戦争が現実起きたことを実感した。さらに、当時実際に流れた開戦を伝えるラジオ放送を流す【手立てb「こと」】と、今まで騒がしかった教室が一気に静まり、児童Aが発言1で「怖い」とつぶやいた（資料3）。理由を問うと、発言2「急に今日から戦争が始まると思うと…」と答えた。そんな児童Aの返答を踏まえ、T5「もし『今日から戦争が始まる』と言われたら、みんなならどう思うかな」と発問した【手立てc】。児童Aは発言3で「私ならそもそもなぜ戦争に発展したのか疑問に思う」と意見を述べた。この発言から「確かに」という声が上がりが始め、子供たちの中で開戦のきっかけを知りたいという意識が芽生え始めた。そこで、開戦に至った経緯について調べていくことにした【手立てa】。

第2時から第3時にかけて、調べ学習に取り組み、開戦に至る史実を理解していった。そして、「真珠湾攻撃」をきっかけに戦争が長く、大きくなり、人々が戦渦に巻き込まれたことを伝えた。その上で、戦地に向かう大人とそれを見送る子供の写真を提示し、T6「これから戦争に行く大人とそれを見送る子供はどんな思いだろう」と発問した【手立てc】。すると、C16「大人は嫌な思い」などと現在の感覚で捉える意見が多く上がった（資料4）。そこで、T7

産業が発展したことで働く女性が増えたことがわかりました。でも、女性には選挙権が与えられなかったのは、女性の身分が男性より低く見られていたということだと思うので、かわいそうだと思いました。

資料1：児童Aの振り返り①



資料2：学校日誌（S16.12.08）

A1：怖い。
T4：どうして？
A2：急に今日から戦争が始まると思うと…。
T5：もし『今日から戦争が始まる』と言われたら、みんなならどう思うかな。
C8：絶対に嫌だ。
C10：俺も。死にたくないし。
A3：私ならなんで戦争に発展したのかって疑問に思う。

資料3：授業記録①

T6：これから戦争に行く大人とそれを見送る子供はどんな思いだろう。
C16：大人は嫌な思いでいっぱい。
C17：子供は悲しい思いをしてそう。
T7：本当にそう思っているのかな。
C20：当時の人じゃないから分かんない。

（インタビュー動画視聴）

小早川さん：喜んで戦争に行っちゃったよ。
池田さん：僕は軍国少年で兵隊に憧れていた。

C21：ありえない。

資料4：授業記録②

「本当にそう思っているのかな」と問いかけると、C20「当時の人じゃないから分かん」と答えたため、事前に用意した、当時海軍飛行予科練習生であった学区在住の小早川さん（98歳）と当時小学生として戦争を経験した学区在住の池田さん（91歳）のインタビュー動画を提示した【手立てb「人」】。子供たちは、小早川さんの「喜んで戦争に行った」や、池田さんの「僕は軍国少年で兵隊に憧れていた」という発言を聞き、C21「ありえない」と衝撃を受け、騒ぎ立てた。戦争への関心が高まったところで、単元を貫く学習課題「戦時中を生きた人々はどんな思いだったのだろう」を設定し、授業を終えた【手立てa】。

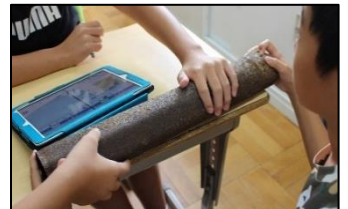
児童Aは本時の振り返り（資料5）にて、「戦争の写真正は見たくない」と戦争に対して心理的抵抗を示した。また、教師の発問（前頁資料4T6）と2人の戦争体験者の発言を受け、「私が戦争に行くなら最悪と思う」「今ならありえない」と記述し、問題を自分に引き寄せて捉えた上で、現在と当時の価値観のずれを認識しているようだった。さらにその価値観のずれから、「80年前の日本はどんな時代か気になる」と新たな問いを見いだしていた。この問いを生かし、次時では、当時の日本の様子や戦争による影響について追究していくことが決まった【手立てa】。

私が戦争に行くってなったら最悪ってなるけど、小早川さんが喜んで行ったと言っていたのを聞いて、今ならありえないなあと思いました。だから80年前の日本はどんな時代だったのか気になります。でも戦争の写真正とかはグロくて見たくない気持ちもあります。

資料5：児童Aの振り返り②

<第4～5時 戦争による影響について調べよう>

まず、戦争が激化したことにより、様々な地域で国民が大きな被害を受けたということの現実感をもたせるために、焼夷弾の実物に触れる場を設定した【手立てb「こと」】。児童Aは、「こんなもの（焼夷弾）が当たり前に降ってくるなんて、当時の人々は命がけだったんだ」（資料6）とつぶやき、当時の状況に目を向け始めたのであった。さらに、原爆による被害の様子をまとめた資料映像を提示すると、初めて見る衝撃的な映像に目や耳を塞ぐ姿が見られた。視聴後、原爆投下についてどう思ったか問うと、子供たちは、「ひどい」「怖い」などと一面的な見方をした考えを述べた。そこで、アメリカでは原爆投下直後の1945年時点で約85%の人々が原爆投下を肯定していることを資料で伝え、困惑した様子を見せた子供たちに、「どうしてアメリカの人たちは、原爆投下を正しいと考えたのだろう」と問いかけた【手立てc】。すると、「先に日本が真珠湾攻撃をしたから」などアメリカ側の視点に立った意見が多く上がった。しかし、アメリカ側の視点のみに立って考えた結果、原爆投下は「正当化される」と捉えるなど、一面的な捉え方に傾いてしまう子供も多く見られた。



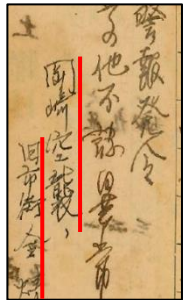
児童A：こんなものが毎日当たり前に降ってくるなんて、当時の人々は命がけだったんだ。

資料6：焼夷弾（実物）に触れる

児童Aは、振り返りで、「今は人が一人殺されるとニュースになるのに、当時は何の罪のない人たちがたくさん殺されることが当たり前なんだと分かった」と記述し、現在と比較しながら当時の時代背景を把握していった。

<第6時 岡崎市の被害に迫ろう>

前時の振り返りで「岡崎市の被害を知りたい」と記述した子供がいた。そこで、戦争が深刻化した昭和20年の学校日誌から調べるよう促すと、7月19日に記載の「岡崎空襲市街全焼」の文字（資料7）から、岡崎市も戦争による大きな影響を受けたことに気付いていった【手立てb「もの」】。そこで、岡崎空襲を体験した近藤さん（94歳）のインタビュー動画を提示し、理解を深めることにした【手立てb「人」】。視聴中、児童Aは、「あの通りに防空壕があったんだ」などつぶやき、戦争を身近に捉えていった。また、視聴後に多くの子が大樹寺学区も岡崎空襲の被害にあったのか疑問を抱いていたので、岡崎空襲の死亡者名簿（町名付き）を提示し、気付いたことを問いかけた。「学区の人の名前がない」「この辺は空襲が来なかったのか」などの声上がり、話題が「当時の大樹寺学区の様子」に焦点化されたので、次時で調べることにした【手立てa】。



資料7：岡崎空襲「市街全焼」

<第7時 大樹寺学区の被害に迫ろう>

本時では、子供の「当時の学区を知る人に聞きたい」というつぶやきを捉え、学区の歴史や実情に通じた大樹寺の執事である野村さんに話を伺った（資料8）【手立てa、b「人」】。野村さんの話から、町民が集まって防空壕を掘ったことなど被害の背景にあった当時の生活の様子が明らかになった。



資料8：野村さんのお話を聞く

児童Aは、振り返り（資料9）で、当時について「地獄」と表現し、「私ならこんな生活耐えられないけど、当時の人々はどう思っていたのかな」と当時の生活を自分と結び付け、疑問を抱き始めた。

大樹寺学区は大きな被害を受けていないことが分かりました。あと、当時は空襲警報が毎日鳴り、安心して寝ることもできなかったと知りました。当時の人々の生活は地獄だなと思いました。私ならこんな生活耐えられないけど、当時の人たちはどう思っていたのか気になるので、もっと話を聞きたいです。

資料9：児童Aの振り返り③

<第8時 当時の国民生活に迫ろう>

児童Aをはじめ、多くの子が前時の振り返りで「当時の生活についてもっと話を聞きたい」と記述していた。そこで本時は、岡崎空襲体験者の近藤さん（94歳）を招き、直接話を伺う機会を設けた（資料10）【手立てa、b「人」】。当時、学生だった近藤さんから、授業の一環で軍事的訓練が行われていたことや、給食が停止され、空腹でイナゴを食べていたことを聞き、学校生活まで戦争の影響を受けていた様子をつかんでいった。そんな中、児童Aが「やっぱり戦争って嫌だな」と口にした。すると近藤さんから「当時は戦争への否定的なことは言えない」「国民一丸となって協力していた」と伝えられた。また、話の最後に「私も日本が勝つことを本気で望んでいた」と告げられた。その事実は、子供たちに認識の転換を迫るものであった。



資料10：戦争体験者の生の声に触れる

近藤さんの話を聞いて80年前は、学校の授業から遊びまで毎日戦争づけだったと知り、兵隊に憧れていたと言っていた当時の子供の気持ちが少しわかった気がしました。私は80年前の日本を地獄だと思っていたけど、当時の子供たちの中にはそう思っていなかったことがわかりました。近藤さんの話を聞いてもっと当時の生活を知りたいと思いました。

資料11：児童Aの振り返り④

児童Aは、振り返り（資料11）で「兵隊に憧れていた子供の気持ちが分かった」と記し、現代と当時の価値観のずれが薄れたようだった。また、「当時は地獄だと思っていたが、当時の子供たちの中にはそう思っていない子もいた」と記述したことから、前時の振り返りと違い、当時の立場に立って考えようとしている姿が見られた。

<第9～11時 当時の子供の思いに迫ろう>

本時は、資料11の「もっと当時の生活を知りたい」という児童Aの言葉を取り上げた。すると、一人の子が「実際に体験しよう」と発言した。そこで、当時の学校生活を再現し、「タイムスリップ」と名付けた追体験から、当時の子供の思いに迫る学びへとつながった(資料12)

【手立てa、b「こと」】。「タイムスリップ」を経て、子供たちに感想を求めるとC5「竹槍なんてばかばかしい」C6「すいとんはめっちゃまずかった」などと述べた

(資料13)。そこで、T3「当時の子供たちもみんなと同じ思いだったのかな」と問い返すとC7が「当時は違う」と答えた【手立てc】。続けてC8「俺らも当時生きていたら本気で竹槍やっていたかも」と述べた。児童Aも「私はすいとんをまずく感じたけど、当時の子供からしたらご馳走だったと思う」と発言し、当時の状況に身を置きながら考えているようだった。

児童Aは振り返り(資料14)で「もう二度とこんな生活はしたくない」

「学校なのに人を殺す訓練をしていたなんて怖い」と記述していた。「タイムスリップ」を通して、戦争は人々の生活だけでなく、学校の在り方まで変えてしまうことを自分の生活と結び付けながら実感している様子であった。

最後に、当時の人々の思いに迫れたかどうか問うと、「人々」ではない」と答えた。そこで、「人々」とは他に誰を指すのか聞くと、「親」「先生」など子供たちの身近な人や「兵隊」といった声が上がリ、それぞれの立場から追究していくこととなった【手立てa】。

<第12～14時 親・先生・兵隊の思いに迫ろう>

① 「親」の思い(第12時)

第12時の導入で、息子の出征を見送る母親の映像を流した。「万歳」と見送る母親に児童Aは「なぜ万歳なのか」と疑問を抱いた。そこで、前述の小早川さんの奥さんのインタビュー動画を提示した

(資料15)【手立てb「人」】。小早川さんから兄が出征したときの母の行動について語られた。兄のためにお百度参りをしたり、人目につかない裏口で涙を流したりしたことを聞き、児童Aは「胸が張り裂けそう」という悲しい思いと「万歳と言うしかない」というもどかしさとの間で揺れ動く母親の葛藤に思いを巡らせた(資料16)。

② 「先生」の思い(第13時)

本校の風土記「大樹寺小学校の百年」(昭和48年発行)には、戦時中に本校で教員を務めていた石川先生の証言が綴られており、導入においてそれを提示した【手立てb「もの」】。資料を基に、石川先生の思いを考察し、話し合った(資料17)。児童Aの発言1「石川先生は本気で子供を戦地に送ろうとした」のような戦争を肯定的に捉える意見が多く上がったので、T4「石川先生は教員の立場から戦争をどう思っていたのかな」と発問し、子供たちの思考に揺さぶりをかけた。そして、チームを構成し、話し合いを促した【手立てc】。発言1で肯定的と述べた児童Aだったが、友達の意見を聞く中で、本当に肯定的なのかと考えが揺れていた。しかし、C11の「内心可哀想に思っていた」という意見を聞き、発言2「本当は反対していたけど、態度には出せなかった」と考えを変容させ、当時の人々の行動には、本音と建前が併存していたことを把握できた。

③ 「兵隊」の思い(第14時)

第14時の導入で、昭和20年学校日誌記載の「山本教頭應召」の文字を提示し、その意味を予想させた(資料18)【手立てb「もの」】。すると、一人が「もしかして山本教頭先生が兵隊に行ったってこと?」とつぶやいた。このつぶやきに子供たちは驚いた様子を見せた。ある子の「先生たちも兵隊に行かされる?」という声を取り上げ、戦地に赴く兵隊の思いを体験談を基に話し合った。「本当は怖い」

「逃げたい」などと否定的な感情が多く上げられる中、前頁で「喜んで戦争に行った」と発言していた小早川さんのインタビュー動画の続きを提示した(資料19)【手立てb「人」】。視聴後、「兵隊はみんな戦争に否定的だったのかな」と問いかけた【手立てc】。その結果、「本気でお国のために出征した人もいた」「家族のためにしようがないと思った人もいた」など、小早川さんの話を基に、様々な立場に置かれた兵隊の思いに迫っていった。

<第15時 戦時中を生きた人々はどんな思いだったのだろう>

本時は、当時の「子供」「親」「先生」「兵隊」がそれぞれどんな思いをもって生きていたのかこれまでの学習を

C4:教科書も戦争一色で完全に洗脳だ。
C5:竹槍なんてばかばかしい。
C6:すいとんはめっちゃまずかった。
T3:当時の子供たちもみんなと同じ思いをもっていたのかな。
C7:当時は違うんじゃない?
C8:俺らも当時生きていたら本気で竹槍やっていたかも。
T4:どうして?
C9:これで米兵を殺せるって先生から教わるんだから、信じるでしょ。
A2:私はすいとんをまずく感じたけど、毎日イナゴを食べていた少国民にとっては、ご馳走だったと思う。

資料13:授業記録③

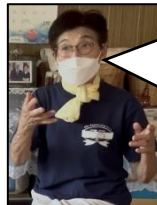


資料12:タイムスリップ

- ①すいとん作り
- ②竹槍訓練
- ③防空壕体験

竹やり訓練や防空壕をタイムスリップで体験したけど、こんな生活はもう二度としたくないと思いました。なぜかという、戦争中は学校なのに人を殺す訓練をしていて狂気を感じたからです。戦争は学校生活も変えてしまうことがわかりました。

資料14:児童Aの振り返り③



母は、出征する兄のために毎日お百度参りをしていた。
兄の出征のとき人目につかない裏口で泣いていた。

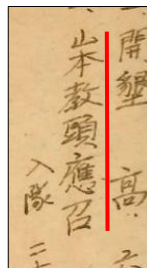
資料15:母の思い

母親は子供を戦争に行かせることは胸が張り裂けそうなくらい嫌だったのではないかと思います。でも、戦争に行かないでとは言えない時代なので、万歳と言うしかなかったんだと思います。

資料16:児童Aの振り返り⑥

A1:「よくもあんなことをしたと思われる教育」ってことは、本気で子供たちを戦場に送り込もうとしていたんじゃないかな。
T4:石川先生は戦争をどう思っていたのかな。
(チームでの話し合い)
C9:今になって「よくもあんなことをした」って振り返っているから当時は肯定していたんじゃない?
C10:いや、でも「かわいそうに」って書いてあるから、内心戦争を恨んでいたんじゃない?
C11:芋を「こっそり」あげたって書いてあるから、石川先生はご飯が食べられない子を内心可哀想に思っていたはず。だから心では戦争に反対していた。
A2:なるほど。だから本当は反対していたけど、態度には出せないのか。

資料17:授業記録④

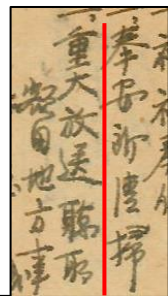


資料19:兵隊の思い

資料18:出征の日「山本教頭應召」

当時は喜んで戦争に行ったよ。
「お国のため」「天皇陛下のため」という思いで出征した。
今考えればばかばかしいと思うが、当時は本気だったよ。

根拠に構築した自分の考えを話し合った。出た意見は、「本気で兵隊を目指した」「天皇や国のために出征した」などの戦争に対する肯定的な考えと、「不安」「仕方ない」のような否定的な考えに分類し、立場ごとに板書していった。この板書を活用し、戦時下には、様々な立場の人々が戦争に対して肯定的な思いと否定的な思いを抱えていることを確認した。その上で、昭和20年8月15日の学校日誌に綴られた「重大放送聴取」(資料20)を提示すると、「何の放送だろう」「国民を励ます放送かな」などと声が上がりが始めた【手立てb「もの」】。子供たちの反応を受け、当時実際に流れた玉音放送を聞かせた【手立てb「こと」】。予期せぬ形で伝えられた終戦の放送に、子供たちは困惑した様子を見せた。そこで、「人々は終戦を知り、喜ぶのか悲しむのか」と問いかけた【手立てc】。児童Aは葛藤の末、戦争を肯定する人々の思いを踏まえ、「悲しむ」を選択した。しかし、自分の考えに納得しきれず、終戦の日、人々は何を思っていたのかを何度も問い直す姿が見られた。



資料20：8月15日の「重大放送」

個人追究の後、意図的にチームを構成し、対話を促した【手立てc】。児童Aはチームを組んだ瞬間、真っ先に発言2「みんなはどう思う？」と友達に意見を求める姿が見られた(資料21)。それを受けてC24は「子供や生徒が死なずに済んで親や先生は喜ぶ」と答えた。対してC25は「中には戦争で親や子を亡くした人だっている」と異なる立場から意見を述べた。その対話から、児童Aは発言3で「立場によって思いが違うのかも」と新たな見方に気付いていった。

T16：人々は終戦を知り、喜んだと思う？悲しんだと思う？

(チームでの話し合い)

A2：当時の人々は勝つことを本気で望んでいたから悲しむと思うんだけど、みんなはどう思う？

C24：私は喜ぶと思う。だって親や先生からすると自分の子供や生徒が死なずに済んだから。

C25：中には戦争で親や子を亡くした人だっているよね？

C26：今なら喜ぶ一択だけど、その当時はいろんな人たちがいたからね。

A3：兵隊に憧れていた子は悲しむし、戦地に泣く泣く行った兵隊は喜ぶから、立場によって思いが違うのかも。

資料21：授業記録⑤

全体での話し合いは、資料22のように進んだ。「喜ぶ」と「悲しむ」の立場に分かれた意見が続く中で、児童Aが発言4で、チームでの話し合いを基に、どの立場の視点に立つかによって思いが違うことを述べた。児童Aの発言に多くの子供たちが納得した反応を見せ、「喜ぶ」「悲しむ」の両方を選択し、様々な視点から考察した意見を述べる子が増えていった。そんな中で、C39が「僕は何も感じないと思う」と発言した。その言葉を聞き、教室が一瞬、静寂に包まれた。T17「どういうこと」と問うと、C40「失ったものはもう戻ってこないで、次に進む気力が起きないと思う」と答えた。それは、当時の人々に感情が存在しなかったのではなく、感じ取れないほど追い詰められた状況に置かれていたことを本人なりに捉えた結果であると感じた。そこで、T18「失ったものとは何か」と全体に問い返すと、「家族」「心」など様々なものが上げられた。この「何も感じない」という発言をきっかけに「喜ぶ」「悲しむ」の二項対立に捉われない「戦争に負けるのは初めてだから今後どうなるか不安」「負けたことへの怒りが湧く」などの新たな思いがたくさん出され、子供たちが当時の人々の思いにより深く迫っていく様子が見られた。

C28：悲しいと思う。天皇陛下への裏切りに感じるから。

C29：喜ぶと思う。空襲がなくなって安心して生活できるから。

A4：私は喜ぶと悲しむのどっちもで、兵隊に憧れていた子供は悲しいかもしれないけど、赤紙をもらって戦地に行かなければいけない兵隊は喜ぶと思う。

C30：僕も喜ぶと悲しむのどっちもで、兵隊の中にも天皇陛下に申し訳ないと悲しむ人もいし、生きて家族に会えて喜ぶ人もいしから、両方だと思う。

(中略)

C39：僕は何も感じないと思う。

T17：何も感じないってどういうこと？

C40：失ったものはもう戻ってこないで、次に進む気力が起きないと思う。

T18：失ったものって何かな？

資料22：授業記録⑥

児童Aは振り返り(資料23)で、「私なら悲しむ」と記述し、課題を自分事として捉えようとした。そして、「戦時中を生きた人々はどんな思いだったのだろう」という単元を貫く課題に対し、友達の意見を踏まえ、「国民一丸となっていた時代なのに思いはひとつではなかった」と自分なりの考えを確立したようであった。また、「本当のところ、人々は何を思っただろう」と自らの考えを問い直し、当時の人々の思いについて迫り続けようとする切実な姿が見られた。

私が当時を生きていたら悲しむ思いになると思いますが、みんなで話し合う中で、喜ぶや悲しむ以外にも不安や怒りなど他の感情も出てきて、国民一丸となっていた時代なのに、思いはひとつではなかったことがわかりました。もしかしたら、さんが言ったように、何も感じなかった人もいたかもしれません。だから、本当のところ人々は何を思っただろうと気になりました。

資料23：児童Aの振り返り⑦

<第16～17時 当時の人々に思いを届けよう>

導入で児童Aの「本当のところ、人々は何を思っただろう」という問い(資料23)を取り上げ、全体で共有した。すると、多くの共感の声が上がったため、戦争体験者の方々へ手紙を送り、終戦の日の話を伺うことにした【手立てa】。

数日後、戦争体験者の方々から返事(資料24)が届き、子供たちに読み聞かせた【手立てb「人」】。そこには、「子供は空襲に怯えず遊べることをうれしく感じた」という子供の思いだけでなく、「大人は今後の生活が不安だった」という大人の思いも記されており、当事者の声を通して、様々な立場で多様な思いを抱いていたことを改めて確認することができた。そして、手紙の最後には、「戦争について伝えたり、考えたりしてくださるとうれし」という一文が綴られていた。

単元のまとめでは、当時の人々に手紙を書く時間を設けた。

児童Aは、資料24で語られた戦争体験者の思いを踏まえ、「最初は戦争なんて怖いな」としか思っていなかった

が、本気で兵隊を目指している人や寂しい思いをしている人がいることがわかった」と記し、戦争を恐怖という一面的な感情だけで捉えていた段階から、立場の違いによって、多様な思いが存在する出来事として認識するようになった(資料25)。また、戦争体験者の方々から託された言葉を受け、歴史を現在と結び付けて理解した児童Aは、「みなさんが必死に生きてくれたおかげで今がある」と記述した。その上で記した「みなさんのことは生涯

資料24：終戦の日の思い(一部抜粋)

資料25：児童Aの手紙(一部抜粋)

最初は戦争なんて怖いなとしか思っていなかったけど、勉強して行く中で、将来本気で兵隊を目指している人を見れば、お腹が空いたり、家族と会えなくてさみしい思いをしている人もいることがわかりました。一丸の時代で戦争を悪く言うことはできないから、がまんしている人もいいるかもしれない。そんなみなさんが必死で生きてくれたおかげで、今の私たちの平和な時代があるのだと思います。だからこゝろ、みなさんのことは、生涯忘れません。私はこれからみなさんの思いを考えつづけていきたいです。そして、みなさんの生き

忘れない」という言葉には、実践を通して芽生えた切実感を抱き続けようとする意思が表れていた。かつて歴史を「単なる昔話」と捉えていた児童Aにとって、時代を超えて届けられた一通の手紙は、歴史を「今を生きる自分につながるもの」へと捉え直すきっかけとなった。そして、「これからもみなさんの思いを考え続けたい」という言葉には、今後も当時の人々の思いに対して、向き合い続けようとする姿が表れていた。

5. 実践の考察

【手立てa 子供の思考に沿った単元構成】

単元を通して、子供の疑問が次の問いへとつながり、思考が連続的に展開される可能性が確認できた。第4～7時では、子供が見いだした問いを基に、全国各地から岡崎市、大樹寺学区へと課題の視点を焦点化したことで、戦争を身近な事象として捉え、現在の生活と関連付けながら考えようとする姿が見られた。児童Aもその一人であり、当初は「今ならありえない（資料5）」と戦争を過去の出来事として捉えていたが、「私ならこんな生活耐えられない（資料9）」と自分と結び付けて考えることができた。また、戦争体験者の話に目を向け始めた子供のつぶやきを捉え、戦争体験談を軸とした授業へと転換した結果、課題が自分の問いに直結し、「もっと当時の生活を知りたい（資料11）」と追究意欲を高める姿が見られた。さらに、児童Aは、第15時の振り返りで「本当のところ、人々は何を思ったんだろう（資料23）」と記し、自分の考えを問い直そうとする姿を示した。単元前後のアンケートでは、「歴史に興味がある」と回答した児童は、68%から93%へ増加した。このことから、子供の思考に沿って単元を構成したことで、歴史への興味・関心が高まり、切実感を抱いて追究する姿につながったと考える。

以上から手立てaは、一定の成果を得ることができた。しかし、手立てaのみでは、切実感を高める上での成果は限定的であったため、後述の手立てb、cと組み合わせることでその有効性が高まることが明らかとなった。

【手立てb 戦争に関する「人」「もの」「こと」と出会う場の設定】

「人」戦争体験者との邂逅：単元を通して、計8本の自作インタビュー動画を視聴する機会を設けることにより、多様な「人」と出合わせることができた。当初「当時の人じゃないから分かん」と思考が現在の価値観にとどまっていた児童Aは、「喜んで戦争に行った」「兵隊に憧れていた」などの戦争体験者の語りに触れることで、現在と当時の価値観のずれを認識していった。そして、当時を「地獄（資料9）」と一面的に捉えていたが、岡崎空襲体験者の近藤さんとの出会いから、「当時はそう思っていない子もいた（資料11）」と考えを更新した。また、小早川さんの奥さんの話から、本心を隠して万歳と言わざるを得なかった母親の思いに気付き、当時の立場から人々の思いを考える姿が見られた（資料16）。さらに、第16～17時では、戦争体験者の語りを手がかりに、「本気で兵隊を目指している人や寂しい思いをしている人がいることがわかった（資料25）」と記し、出来事の表面的な理解にとどまらず、当時の人々が抱えていた思いにまで考えを巡らせることができた。

「もの」学校日誌・風土記の活用：学校日誌を単元を通して継続的に活用したことで、子供たちは戦時下の人々の暮らしや学校生活を教科書の中の出来事ではなく、実際に起こった出来事として捉える姿につながった。導入では、学校日誌に記された「無言清掃せよ」の文字を見て、現在の学校生活と比較する姿が見られた。また、「岡崎空襲市街全焼」の記述（資料7）から、岡崎市も空襲の被害を受けていたことを知り、戦争を身近な出来事として実感していた。さらに、風土記の「よくもあんなことをしたと思われる教育」という記述を根拠に、「本気で子供を戦地に送ろうとしたと思う（資料17）」と、資料を基に当時の人々の思いを考察する姿が見られた。

「こと」戦時下タイムスリップ体験：「タイムスリップ」と称した活動から、戦時下の学校生活を追体験した上で、現在と当時の価値観を区別し、生活条件の違いを踏まえて当事者の立場に立とうとする姿が見られた（資料13）。児童Aは、振り返りに「学校なのに人を殺す訓練をしていたなんて怖い（資料14）」と記述した。このことから、戦時下の学校生活を自分たちの生活と結び付けて捉え、当時の人々が置かれていた状況を具体的に想像し、その思いに迫ろうとしたといえる。また、開戦のラジオ放送を聞いた児童Aは、「今日から戦争が始まると思う」（資料3）」と当時の状況に身を置き、人々が抱いた不安な気持ちを想像していた。さらに、焼夷弾の実物に触れたことで「当時の人々は命がけだった（資料6）」と、当時の生活の過酷さを実感を伴って捉えようとした。

以上から手立てbは、立場や時代背景を踏まえて当時の人々の思いに迫る上で有効であったと考察した。

【手立てc 多角的な見方へと導く「教師の出」】

第4～5時では、原爆投下を肯定的に捉えるアメリカ人が多いことについて「どうしてアメリカの人たちは、原爆投下を正しいと考えたのだろう」という客観的に原因を探る問い返しをした。その結果、アメリカ側に立ち、「原爆投下は正当化される」と一面的に捉える子が多くなる課題が残った。そこで、第14時では、当時の先生は戦争に肯定的だと認識した子供たちに対し、「石川先生は教員の立場から戦争をどう思っていたのかな（資料17）」と当事者の立場や気持ちに視点を向ける問い返しをし、自分の考えを構築した上で、話し合う場を設定した。これにより、「本当は反対していたけど態度には出せなかった（資料17）」と、当時の人々の行動には本音と建前が併存していたことを捉えた。さらに第15時では、終戦を知った人々の思いを「喜ぶ」のか「悲しむ」のかという二項対立で問い返したことで、子供たちは対話しながら、自分の考えを問い直す姿を示した。児童Aも自らの考えに迷い、「どう思う？（資料21）」と意見を求める様子が見られた。そして、それぞれの立場の違いに着目し、人々の思いが一樣でないことに気付いた（資料22）。振り返りには、「国民一丸の時代なのに思いはひとつではなかった（資料23）」と記述するなど、多角的な見方から当時の人々の思いに深く迫ろうとする姿が見られた。

以上から手立てcは、子供の思考の実態を基に問い返しを修正したことで、有効性が確認できたと考察した。

6. おわりに

児童Aの手紙（前頁資料25）には、まだ続きがあった（資料26）。

最初は、「戦争の写真は見たくない（資料5）」と戦争の事実から目を背けようとしていた児童A。本実践を通して、その姿は次第に変容していった。手紙には、「みなさんが生きた時代がいつか誰も知らない歴史になってしまわないように、私たちが伝えていきたい」と綴られ、自ら平和な未来を築こうとする切実な思いが表れていた。さらに、手紙の結びには、「みなさんと出会えてよかった」と記されており、当時の人々を一方的な過去の存在としてではなく、同じ時代を生きた「人」として捉えている様子が読み取れた。

ていきたいです。そして、みなさんの生きた時代がいつかだれも知らない歴史になってしまわないように、私たちが伝えていきたいと思っています。私は授業の中でみなさんと出会えてよかったです。

資料26：児童Aの手紙の続き